

東京ごみ戦争からみるプラスチック問題

マシンガンズ

滝沢 秀一

1. スクラップアンドビルドのしわ寄せという礎

包装の話ばかりで飽きてきた頃だと思うので箸休めのつもりで読んで頂きたい。食品包装の専門誌でそんなことを言うのも思慮を欠く発言かもしれないが、芸人であり、且つごみ清掃員の話であるので目くじらを立てないで受け流してほしい。今書いたように私は単なる“いち”ごみ清掃員で、専門家ではないので、少し他の頁の先生方とは違った視点でお話をしたい。いや、視点どころではない。テーマこそずれないが、入口を大幅に変えたい。

東京ごみ戦争の話だ。

東京ごみ戦争を知ったのは、私が通うごみ清掃会社の片隅でほこりをかぶっている資料の中から見つけた。ごみ清掃が始まった頃は今のような清掃車ではなく、手押し車から始まり、街にはごみが溢れる遙か昔の白黒の写真。



図1) 手押し車でのごみ清掃作業

頁が進むにつれ時代は変わり、カラー写真になってからも最終処分場には砕かれないでそのまま埋められているドラムセット等、今では考えられない当時から伝えるごみ清掃の歴史を垣間見ることができる資料に私は興奮した。



図2) 最終処分場に埋められたドラムセット

休み時間に睡眠時間を確保するのも忘れ、夢中になって読み進めていると、ごみ清掃の歴史には避けて通れない出来事があったという。それが1971年に美濃部都知事が宣言した『東京ごみ戦争』である。東京ごみ戦争を知らない方に大雑把な概要を伝えると、江東区と杉並区がごみをめぐり抗争を総じてごみ戦争と呼んでいる。(美濃部都知事はこの二つの区の争いをごみ戦争と言った訳ではない。※後述する。) 私はこの資料に書いてあること以外にもごみ戦争のことが知りたくなくて色々調べた。最終的には杉並清掃工場内にあある東京ごみ戦争歴史みらい館に足を運ぶほど興味をそそられた。

ごみをめぐり争いになったのは時代的な背景がある。

日本は1950年から70年代にかけて高度経済成長期と呼ばれる時代に伴い、大量生産、大量消費こそが世界に追いつくための経済活動として美徳と信じられていた。戦争の敗戦によりスクラップアンドビルドを強制的にせざるを得ない日本は“物”が生まれることが豊



かさに繋がり、物の所有がある一定ラインを越えれば、破棄することによって余裕が生まれた証拠として、地道に努力してきた自分達を称賛できる精神的な安定剤となった。こうして大量生産、大量消費、大量廃棄という構図が生まれ、そのしわ寄せとして埋立地で処理される廃棄物は急激に増加した。日々の廃棄に処理は当然追いつかず、全体の65%は焼却処分が間に合わないの、そのまま埋めざるを得なかった。

このことによって何が起ころかという最終処分場を抱えている江東区には悪臭が漂い、大量の蠅が発生し、劣悪な衛生環境が目に見えるようになって、初めてごみ問題が取りざたされるようになった。

本当は知っていたはずだった。

当時、日に一万二千トンのごみが23区から江東区に集まってくる。六千台もの清掃車が一斉に集まれば交通渋滞も生まれ、排気ガスによる空気汚染、停車中に清掃車から流れる汚水も雨が降らなければ流れず、夏は外に出れば吐き気がするほどで出られないという。こういう状態がある日、突然好転することはないので、住民の声をすくって早急に対処すべきだったが、ごみというものをないがしろにしていたツケがまわってくることになる。しかし縮図的に考えてみれば自分の生活でごみのことを考える人はあまりいない。捨てるときに溜まったから捨てようとするだけで、実は何を捨てているかを思い出せる人は少ない。ごみとはそういうものだ。

2. 令和ごみ戦争の予兆

実はごみは目の前から無くなれば、殆どの人は消えて無くなったと錯覚するものだが、ごみを処理する方はとても苦しむ。私は仕事上、色々な廃棄業者や専門家と会う機会があるので、その度に東京ごみ戦争の話をしていたら、当時南砂町に住んでいたという人にお会いして貴重な話を聞かせていただいた。

ランドセルの脇には蠅叩きを持参し、教室に着いたら、まず自分の席にいる蠅を叩くことから一日が始まるという。授業もそっちの気で、顔周辺で羽音を立てて飛び回る蠅を払っては叩きつける。授業の内容なんて覚えていない。給食の時間になり、行きたかったトイレから帰ってくると誰かが親切にパンを机に置いてくれた人がいるが、真っ黒のパンが動いていたというから腰が抜けそうになったという。パンにびっちり蠅がたかっていたという。



図3) 教室に着いて最初の作業は蠅叩き

その経験談を聞くだけで江東区民の苦しみは相当だと思うが、そこで立ちあがったのは当時の美濃部都知事だった。

「自分の区で出たごみは自分の区で処理をする。つまり清掃工場の建設が急務である」その清掃工場建設に反対したのが、杉並区の住民であった。その姿勢に憤慨したのは江東区で、態度を変えないのならば、杉並の清掃車は区内に入れないとバリケードを作って阻止したのが、東京ごみ戦争である。

この話を聞く限り、杉並区が悪い印象を持つが、私がごみ戦争歴史みらい館に足を運んで見たものは、先祖代々から受け継ぐ土地を納得いく説明なしに用地提供を求める公の姿勢に拒絶したという。

こうして見てみると急ピッチに進めようとした行政の手段に問題があった気もするが、私もその当事者ではないので勝手な推測はできない。全ては資料に基づきながら、想像するしかないが、ここで私が言いたかったのは江東区と杉並区の対立を面白がり、紹介したかったのではない。



今この文章を読んでいる皆さんは何を感じるだろうか？

歴史を基に行政のあり方を学ぶべきだと思うだろうか？ それとも現在衛生的になったごみ清掃には人間対蠅の戦いはもう二度と起こらない出来事なので、自分には無縁と感じただろうか？

私はこのごみ戦争を通して、江東区対杉並区の抗争に留まらず、『人間対ごみ』の戦いと読み取ることができた。当時の美濃部都知事もごみにまつわる抗争をごみ戦争と呼んでいたと思う。人が生きることによって絶対に生じるごみを“ない”ことにしないでしっかりと対峙する、もしくはどのように付き合っていくかの対策を練らなければ、再びごみを通した人々の争いが起こると私は思っている。今、その戦争が再び起こりかけている。いや、現在ごみ戦争の真っ直中なのであることに気付いている人はあまり多くない。

『人間対プラスチック』の戦いである。

この戦いに真剣な眼差しを向けている人々はまだ一部のように感じられる。この専門誌を読む方や仕事上周りにいる人達も意識の高い人達が多くいると思うので、日々プラスチック問題について話をされているだろうが、私の世界の芸人界ではプラスチックの話を知っている人は殆んどいない。ごみ清掃業界で言っても、話す人は一部いるが、それでも全体を見渡せばプラ問題を十分に知っているという人はごく一部である。専門誌や女性雑誌で取り上げられていることはよく見掛けるが、それでも世間から自然発生的に話が持ち上がることはあまりない。切実に訴えている人達はより多くの人に知って貰おうとプラゼロ生活を訴えるが、憎しみの感情が込められているようにすら感じる。

減らすことは私もおおいに賛成である。環境問題の講演をやる立場上諦めるのはいかなるものかと批判をされることもあるが、やはりわたしの意見ではゼロは無理だと思っている。しかしプラスチックの弊害も認めざるを得ない状況であるということも理解している。弊害の詳細は少し検索すれば山程出てくるし、高名な先生方の方がこと詳しく説明していただけるので、そちらに譲るが、岡山でやっている環境番組『Re:seto』で見えてきた海洋汚染は深刻なものがあつた。砂浜や海の中にもマイクロプラスチックが落ちているのをこの目で見れば、ダボス会議での 2050 年には海の生物の数よりプラスチックごみの方が多くなるといふのも頷ける。



図4) 生活の中でプラスチックの利用をゼロにしようと訴えるひと

3. ごみ戦争を回避するために必要なもの

ではどうすればいいか？

生分解性プラスチックにすればいいと一概には言えない。

私は常々、ごみの問題は人の心の問題だと訴え続けてきた。ごみかどうかは人が決めるというのはごみ清掃員を七年間続けてきていて、痛いほど目の当たりにしている。ひとくち食べただけのやきそばをごみとして出されていて回収したことがある。自分の好みの味ではなかったのか、それとも食べたら体調が悪いことに気付いてそのまま捨てたのかわからないが、人間がこれはごみだと決めた瞬間にそのやきそばはまだまだ食べられるのにごみとなる。

この話で何が言いたいかというと、プラスチックはこの世に存在してはいけないとプラゼロを訴える人も、それに対立するプラ関係の人のプラスチックは害にならないし、そも



そも信憑性のあるデータが出ていないと訴えるこの両者に“人の心”というものが含まれていないことが気に掛かる。未来図が悲惨な状況に陥る危険性やプラの有益性を唱えられたところで響かない人には何も届かない。出されたものを使うだけなので、プラスチック製品かどうかも気付いていないだろう。

プラ関係の人から川に流れたペットボトルは殆んどないと断言されたことがあるが、私は落ちているのを沢山見たことがあるので、首を捻った。落ちていたのを見たことがあると言えば、それは過去に捨てられたものであって、ここ最近のものではないと言ったところで信用出来なくなって話すのをやめた。

データは有益だが、それだけでは人は動かない。

私はそもそも海に落ちているプラが悪いと言っている訳ではなく、プラごみに責任を追わなかった人の心が良くないと思っている。見ないふり、後回しは必ず東京ごみ戦争のようなツケがまわってくる。

ここまで話をしてようやく場が整った。

ようやく本題に入れる。

4. 人が代わるからこそ歴史は繰り返す

容器包装の話である。

この会報も当然、プラ問題とは無縁ではないはずだ。

プラでなければ出来ない容器包装がある。安価で利便性があり、酸素や水蒸気などを通しにくいので、食品をパッケージするにはこれ以上の素材はないと思っている。しかしプラでなくとも、いやそもそも包装がついていなくても成立してしまえば、それは時代の流れからいって、近い将来必ず排除される。その包装はリサイクルをすれば、また有効な資源になると訴えたところで、消費者には響かない。

私の妻や友人は捨てるのが億劫だという理由でなるべく包装のついていないものを選ぶようにしているという。

包装がついていないことを訴える商品が出てきたからだ。

ここでのポイントは環境を配慮して包装のついていないものを買うのではなく、捨てるのが億劫だからという理由である。高度成長期には捨てることが気持ちの余裕であったはずの廃棄が、現在では捨てることすら手間だ(ごみ袋の有料化という効果もあり、スペースは金だということに気付いた)というのだから時代は変わった。容器や包装を作る会社は数を作らなければ、売上にならないので、なるべく作りたいが、時代はますますプラゼロと言わずとも脱プラの方向に傾いていくことが予想できる。時代が変わったということは人が変わったということ。人が変わったなら、商売の仕方も変わらなければならない。捨てることすら億劫になっている若者を相手に社会にとって必要な容器や包装になるしか生きる方法はないのではないかと思う。

その方法は私にはわからない。



図5) 生活者の価値観が変わった、作り手の意識やビジネスの着眼点も変えていこう！

生分解性にするのか価値のなかったものに価値を見つけパッケージにするのか人の心を動かすのかはわからないが、ひとつ言えるのは生き残るためには恐らく今までやっていたやり方にメスを入れることから始まり、やるべきこと、可能性は無限大にあるということだ。知恵を絞って目の前で起きているプラ戦争に立ち向かい、利益だけではない自分達の本職がどのように社会に貢献できるかのアイデアを出し提案し続けなければ、再び形を変えた東京ごみ戦争が起こるとも限らない。

時代は間違いなくプラスチック容器包装にとって向かい風になっていることを多くの企業が自覚し、いち早くプラゼロを訴える住民の声が大きくならないうちに拾いあげ、納得させなければ東京ごみ戦争に準ずるプラ戦争は必ず大きくなり、容器包装業界も巻き込まれることになる。私は職業柄、様々な情報を得ているので、容器包装業界の方々が奮闘している努力を目の当たりにしている。その努力の末に素晴らしいアイデアの数々に触れ、感動すら覚えることもあるが、私の妻にはまだラベルレスの喜びしか届いていない。